

広島に行つて感じたこと

高貫 昂

広島に着いて最初に訪れたのは平和記念資料館です。その中で目に飛び込んできた「うちちゃん、もう僕にはとれんよ」という言葉に激しく心を動かされました。それは、お父さんの背中中に刺さったガラス片を子供が必死に取ろうとしたけれど、取れずにお父さんが死んでしまったというとても悲しい出来事でした。もしその場に今の自分を置きかえても

あまりにもむごすぎて想像すらできません。

「ほぼに涙が伝いファインダーを通す情景がうるんだ、まさに地獄だ」という言葉がありました。写真を撮ろうとした人がカメラのシャッターを切ろうとしたけれど、ためらって切ることができませんでした。二十分後にようやく一枚を切ることができたそうです。テレビのニュースではウクライナやイスラエルの戦争の様子を当たり前のように目にするけれど、実際にその場にいる人にはわから

ない情景なのだろうと思いました。

惨状の様子が描かれた絵の中には、三つの死体が膨らみ、変色して男性か女性かわからないようなものでした。これは本当に同じ人間だったのかと思うほど原形をとどめていなくて、想像をはるかに超えていました。

巨大なきのこ雲の写真には、爆心地から撮影された場所までの距離が書かれていて、とてもない大きさに驚きました。

館内の展示品には、本体がとけてぐにゃぐにゃに曲がった自転車、黒い雨がついたレンガ、焼けてボロボロになった衣服、爆風で折れ曲がった太い鉄骨など、全てが原爆の恐るべき威力を物語っているのだと感じました。

ひろしま子ども平和の集いでは、被爆者の体験記で当時水を求める被爆者に水をあげてはいけなさいといわれていました。水をくださいと言っていた少年に、水を一口あげたら死んでしまったという事で、なぜ水を飲ませたら人は死んでしまうのだろうと思いました。

それは命に関わるやけどを負った人たちは、
水を飲んだとたん、ほっと一安心し緊張がゆる
み七くなったといわれています。

最後に訪れた原爆ドームでは、七十九年前
と同じ青空が広がっていて、このあたりにい
た多くの人々が一瞬で犠牲になったところで
す。長い年月がたっても平和の象徴として残
していかねばなりません。

資料館に「人類と核兵器は共存できない」
と書いてありました。確かにそうです。核兵

器をほかの国に見せたところでただの威嚇や
脅威にしかありません。広島や長崎のような
ことをもう二度と起こさないために、核兵
器を作らない、使わない、今あるものは捨て
ないといけなのだと思います。

今回広島に行って、戦争や核兵器のない世
界になってほしいと強く感じ、原爆の恐ろし
さや平和の大切さを未来に伝えていきたいと
思いました。この事業に参加させていたただき
貴重な経験をありがとうございました。